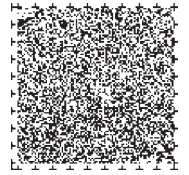


世界自閉症啓発デー2011・シンポジウム 『災害と自閉症～共に支え合い、共に生きる～』 に参加して

発達障害情報センター 金 樹英



2011年6月18日に東京霞ヶ関にて世界自閉症啓発デー・シンポジウムが行われました。国立障害者リハビリテーションセンターからも発達障害情報センターが参加し、日本発達障害ネットワーク（JDD ネット）の被災地派遣チームに随行した鈴木さとみが報告を行いました。発達障害情報センターでは震災後、発達障害児・者の家族や支援者向けに支援のポイントをホームページで発信したり、リーフレットを作って配布してきました。そういった活動の妥当性の確認と、今後どのような情報発信が必要とされるのかを探る目的で参加したシンポジウムでした。

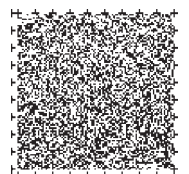
2007年の国連総会で4月2日を「世界自閉症啓発デー」（World Autism Awareness Day）とすることが決議されて以来、日本でも世界自閉症啓発デー・日本実行委員会が組織され、自閉症をはじめとする発達障害について広く啓発する活動を行っています。毎年4月2日にはシンポジウムが開催され、今年も第3回目が4月2日に行われる予定でした。しかし、3月11日の大震災のために延期となり、急遽、テーマも「災害」に変更して今回開催にこぎつけました。

プログラムは『被災地からの報告』、『支援者からの報告』、『今後の課題についてのシンポジウム』という構成でした。『被災地からの報告』では、岩手県、宮城県、茨城県、福島県の自閉症協会からの報告がありました。被災後一週間は自分たちの生活を立て直すだけで精一杯だった、役員自身が自閉症の子どもや介護を要する老親を抱える主婦ばかりで会員の安否確認までに時間がかかった、というお話や、自閉症の子どもが待てなかったり留守番ができないため物資調達が大変だった、学校も休みでレスパイト先がない、避難所にいても自宅にいてもそれぞれ

に質のちがう大変さがある、避難所を利用できたのは自閉症協会の会員の半数ぐらいだった、自閉症児・者は強い不安感から幻覚やフラッシュバックや不眠、こだわりの変化があった、という報告など生の声で聞くことができたのは有意義でした。

午後一番は仙台市立大沢中学校特別支援学級の卒業生を中心にその他の特別支援学校の卒業生や在校生で結成されているバイオリンやチェロなどの弦楽器中心の合奏団、『おお宙（おおぞら）ストリングス』の演奏でした。メンバーの「仕事先で震災にあい雪道を6時間歩いて帰った。途中でもらったおにぎりのおいしさが忘れられずどうしたら復興に役立つことができるか考えている」というメッセージの後に『きらきら星』『夕焼け小焼け』など童謡の演奏が続き、「毎日寄っていたパン屋さんもお店もなくなってしまった」、「演奏を聞いてもらって日本中の人に元気になってほしい」などのメンバーからの一言メッセージが間に入りながら『上を向いて歩こう』『ふるさと』『浜辺の歌』『見上げてごらん夜の星を』といった日本の名曲が次々に演奏されました。後半いつの間にかじーんとなってしまったのは私だけではなかったようです。震災からの3ヶ月を振り返り、いろいろな思いがこみあげてきて聴衆それぞれに涙していました。思いがけず久々に心を洗われたひとときでした。

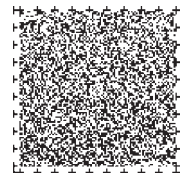
その後、『支援者からの報告』では5人の演者の発表がありました。市立札幌病院静療院の児童精神科医である河合健彦氏が、「子どもの心のケアチーム」として気仙沼に赴いた体験を率直な感想とともに報告されました。過去を整理して未来につなげていくという喪の仕事が、現在の混乱状況のために被災者一人ひとりで異なる進捗度にあること、あまりに過



「平成23年度発達障害者支援センター 全国連絡協議会総会及び実務者研修会」

参加報告

発達障害情報センター 斗内沢 邦男



発達障害者支援センターは、発達障害児（者）への支援を総合的に行うことを目的とした専門的機関で、都道府県・指定都市自ら、または、都道府県知事等が指定した社会福祉法人、特定非営利活動法人等が運営しています。発達障害児（者）とその家族が豊かな地域生活を送れるように、保健、医療、福祉、教育、労働などの関係機関と連携し、地域における総合的な支援ネットワークを構築しながら、発達障害児（者）とその家族からのさまざまな相談に応じ、指導と助言を行っています。

その発達障害者支援センターの全国組織である「発達障害者支援センター全国連絡協議会」の平成23年度総会及び実務者研修会が、平成23年6月3日～4日に大分県大分市において開催され、出席しましたのでご報告します。

1日目午前の「総会」では、平成22年度事業・決算・監査の各報告・承認、平成23年度事業計画・予算案の審議・承認がされました。今年度より「石川県発達障害者支援センター」が新会員となり68団体となりました。午後の研修会では、厚生労働省及び文部科学省からの行政説明後、発達障害情報センター深津センター長から、ウェブサイトのアクセス状況や支援センターの情報共有サイトについて情報提供を行いました。次に全国6ブロックに分かれ、支援センターの活動状況や被災地支援についてブロッ

ク別懇談会が行われました。終了後は再度全体が集まり地元大分県からの情報提供を中心とした情報交換会が行われました。

2日目午前には2つの分科会に別れ「分野別実践報告」が開催されました。第1分科会（支援者ネットワーク）では、茨城県、愛知県、堺市の支援センターから、第2分科会（家族・当事者ネットワーク）では、青森県、広島市、熊本県の各支援センターからの実践報告がされました。午後は公開講座となり、会場となった「コンパルホール（文化ホール）」に支援センター職員のみならず、一般参加者を含め300名ほどの参加者が集いました。「発達障害児・者のユニークさを伸ばす」と題して、東京大学先端科学技術センター中邑賢龍（なかむらけんりゅう）特任教授の基調講演及び「自助活動支援について」のシンポジウムが行われました。「東京大学先端科学技術センター」には、バリアフリーをテーマに福島智教授も所属されているところです。中邑賢龍特任教授は、障害のある人の支援のポイントを理解し、合理的配慮を提供した新しい支援を見出そうと①障害ではなく困難という視点にたち自分の問題として考える②身近なテクノロジーを活用する③本人の努力だけでなく周囲の配慮も不可欠というお話をされました。またシンポジウムでは北海道、島根県、大分県の発達障害当事者がステージ上で、自らの言葉で自らの経験を語りました。とても力強い発言ばかりでした。

会場では、九州という東日本から遠い場所にもかかわらず、多くの方々が「東日本大震災復興義援金」を寄せておりました。今回の研修会は、国の施策や今後の方向性について確認し、改めて発達障害に関する専門性の向上と支援ネットワークを広げていくことが、支援センターの役割として大切であることの再認識の場となったように思います。



会場：コンパルホール

